

国内経済情勢

概 観

秋需の出遅れもあって末端需要が盛り上がりを見せていることなどから、減産強化の動きが広がっている。こうした事情を背景に、製品在庫率は引き続き上昇したものの、製品在庫の増勢は鈍化した。

需給が引き緩むなかで商品市況は軟調に推移し、卸売物価も9月には落ち着きを示した。しかしコスト圧力はなお根強く、また消費者物価は、公共料金の引上げなどから再び騰勢が強まる形勢にある。

金融面では銀行券の増勢が鈍化している。また企業の手元流動性は低下を続け、資金繰りひっ迫感もかなり強まっている。

8月の国際収支は、貿易収支の黒字拡大から經常収支が8ヵ月ぶりに黒字を回復したが、総合収支では、短期資本収支等の大幅赤字が響いて、赤字幅が拡大した。

生産調整広まる

8月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、前月比-2.2%と再び大幅な減少となった。これは、ほぼ全業種にわたって生産調整が強化されたことが主因である。財別にみると、前月の繰上げ増産の反動(自動車)や末端実需の盛り上がり不足による減産強化(繊維等)から、耐久消費財、非耐久消費財が大幅減少を記録したほか、その他の各財も

かなりの減少を示した。

8月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前月比+0.5%の微増となった(除く船舶では同-0.2%の微減)。前月かなりの増加をみた耐久消費財や非耐久消費財が減少を示したが、資本財輸送機械、建設資材が輸出の好調などから増加した。この間生産財は、関連需要業界の大幅減産による需要減退傾向にもかかわらず、輸出の増加に支えられて前月に引き続き横ばいとどまった。

8月の鉱工業生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比+2.0%と増加し、生産者製品在庫率指数(同)は125.1と前月に引き続き上昇した。もっとも製品在庫の増勢は、多くの業種で減産強化につれて鈍化傾向を示しており、なかには製品在庫調整がかなり進捗したものもみられる(自動車、電気機械等)。

8月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は前2ヵ月減少のあと、前月比+0.4%の微増を示した。先行指標である機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み)は、4ヵ月連続増加のあと前月比-8.9%の減少となった。一方建設工事受注額民間産業分(季節調整済み、速報)は、前月比+1.0%と増加した。

8月の全国百貨店売上高は、前月伸び悩んだ衣料品、身のまわり品等の売れ行き回復から前年同月比+24.7%(前月同+21.2%)とやや持ち直した。また9月の乗用車(軽自動車を除く)新車登録台数も、前年同月比-8.9%(前月同-24.8%)と落込み

幅が縮小をみた。

8月の労働関連指標をみると、有効求人倍率(季節調整済み)は1.11(前月1.18)と引き続き低下した。これは、このところほぼ全業種にわたって求人手控えの動きが強まっているためである。名目賃金は前年同月比+31.0%と引き続き高い伸びを続けたが、大型賞与が支給された前月(同+37.9%)に比べれば伸び率は低下した。

商品市況は軟調、消費者物価は騰勢強まる

9月の商品市況をみると、生糸が市況対策の効果もあって反発し、砂糖も海外高からじり高を続けたが、セメント、アルミが上げ止まり商状となったほか、綿糸、合繊、紙、外材等が続落し、また前月末小反発を示した鉄鋼、亜鉛も反落するなど総じて軟調に推移した。これは、期待されていた秋需が公共投資の出遅れもあって盛り上がりを見せていること(鉄鋼、セメント、木材、非鉄等)、輸出の先細り懸念や資金繰りひっ迫感の強まりなどもあって在庫圧迫が見直されたこと(鉄鋼、繊維、紙等)、海外相場の急落(銅、亜鉛)などが主因とみられる。こうした事情を背景に一部(繊維、丸棒、板紙)に換金売りの動きもみられた。

卸売物価は、8月に前月比+1.0%(前年同月比+32.8%)の上昇を示したあと、9月は国内の需給緩和を映じた市況商品の下落のほか、海外相場の急落なども響いて前月比+0.1%(前年同月比+30.6%)の小幅上昇にとどまった。

9月の消費者物価(東京、速報)は、ガス料金が引き上げられたほか、野菜、鶏卵等も急騰したため、前月比+1.9%(前年同月比+22.0%)の大幅上昇と再び騰勢を強めた。季節商品を除く総合でも、前月比+1.6%(前年同月比+21.4%)の上昇

となった。

企業の資金繰りひっ迫感かなり強まる

9月の金融市場をみると、銀行券が1,090億円の発行超(前年同1,795億円)にとどまり、加えて財政資金が、税収増加にもかかわらず、地方交付金の支払増を中心に2,805億円の払超(前年同2,576億円)となったため、月中小幅ながら1,100億円の資金余剰となり(前年同384億円)、日本銀行は貸出回収等でこれを調整した。

この間、コール市場は、月初に地方交付金の支払等から一時的に小緩み、コール・レートは9月2日に0.5%低下したが、その後は都市銀行筋の取入れ需要が引き続き強かったため、総じて引き締めぎみに推移した(10月1日には季節性を映じて0.5%低下、無条件物出し手レート12.50%)。また手形売買市場でも、2日に売買レートが0.5%低下したが、10月に入り年末の大幅資金不足を見越して都市銀行筋の売り意欲が強かったため、5日には年越期日物レートは0.5%上昇した(手形買い手レート年越物13.75%、その他13.25%)。

9月の銀行券平均発行高の前年同月比は+20.3%と前月の伸び(同+21.7%)をかなり下回り、増勢鈍化を示した。8月の広義マネー・サプライ(定期性預金を含む)は、前年同月比+11.2%とほぼ前月(同+11.1%)並みの伸びとなった。

8月の全国銀行貸出は、月中4,913億円の小幅増加(前年同6,970億円)にとどまり、月末残高の前年比伸び率は+12.4%(前月同+12.8%)に低下した。これは、都市銀行をはじめ各業態とも貸出抑制態度を強めているためである。中小企業金融機関の貸出も増勢鈍化を続けているが、政府系中小3公庫の貸出は融資枠追加もあって比較的高水準の伸びとなっている。

この間、企業の借入れ需要は、滞貨、減産資金や手元流動性確保のための資金需要等を中心に高水準を続けている。しかし金融機関貸出は上記のとおり抑制の度を強めているため、企業の手元流動性は低下を続け、資金繰りひっ迫感もかなり強まっている。

8月の全国銀行貸出約定平均金利は、月中0.011%の小幅上昇(前月0.018%の上昇)にとどまり、騰勢はほぼ頭打ちとなった。

9月の公社債市況をみると、上、中旬中は前月に引き続き軟調に推移したが、下旬に入ってから、買い手筋が目先相場観から買い意欲を高めたため下げ渋りに転じ、また条件付売買レートは反落を示した。一方株式市況は、月初から一高一低のうちにもじりじりと値を下げたあと、ニューヨーク株価が12年ぶりの安値に落ち込んだこともあって、月末から10月初へかけて急落した。

8月の経常収支は8ヵ月ぶりに黒字

8月の国際収支は、経常収支が貿易収支の黒字幅拡大を主因に昨年12月以来8ヵ月ぶりに黒字を回復したほか、長期資本収支の流出超幅も縮小したため、基礎的収支ではかなりの改善をみた。もっとも総合収支では、短期資本収支等の大幅赤字が響いて、513百万ドルの赤字と前月(210百万ドルの赤字)に比べ赤字幅が大きくなっている。8月の貿易収支を季節調整後でみると、輸出の高水準持続、輸入の落ち着きから、黒字幅は543百万ドルと前月(同120百万ドル)に比し拡大した。

8月の輸出を通関ベースでみると、前年同月比+68.5%(前月同+56.1%)と既往最高の伸びを示した。輸出価格は、鉄鋼等が上昇を続けたものの、繊維(合繊織物、合繊糸)等が軟化したため、総じて騰勢頭打ちとなった。一方輸出数量は、船

船が前月落込みの反動もあって著伸したほか、鉄鋼、自動車、繊維等もかなりの伸びとなったため、一段と好伸した。地域別には、東南アジア向けの伸びが鈍化したものの、北米向けが引き続き増勢を強めているほか、共産圏、中南米、アフリカ、中近東向け等も前年比倍増の高い伸びを示した。

もっとも9月の輸出信用状接受高(季節調整済み)は、前月比-13.7%と前月までとは様変わりとなった。これは、鉄鋼、化学製品、自動車が伸び悩んだほか、繊維、弱電製品、プラント類等も不振であったためである。

8月の輸入(通関ベース)は、前年同月比+48.9%(前月同+70.9%)と大幅な伸び率鈍化となった。輸入価格は、非鉄金属鉱が大幅軟化したほか、食料品(小麦、とうもろこし等)、羊毛、木材等も続落したため、小幅下落を示した。輸入数量も、原油が国内需給引緩みに加え、貯油能力面からの制約もあって大幅減となり、木材、一部食料品(とうもろこし等)も落ち込んだため、落着き気配を強めた。

9月の外国為替市場をみると、インターバンク米ドル直物中心相場は、中旬に入って輸出好調をながめた商社筋の目先相場観による輸出手形の持込み増もあって急速な下げに転じ、24日には294円60銭(前月末302円70銭)にまで低下した。もっともその後は為銀筋の手元補充買いなどから反発した(9月末298円50銭)。また先物相場も、月初小幅続伸のあと中旬には輸出予約の伸長もあって直物を上回る大幅軟化を示した。このため直先スプレッドは一時若干のディスカウントとなったが、月末にかけて再びプレミアムに戻った(3ヵ月先物プレミアム幅2.01%)。

9月の外貨準備高は、3か月ぶりに月中266百万ドル増加し、月末残高は13,169百万ドルとなっ

(昭和49年10月11日)